

---

# 狼と絶望の黒龍

黒馬狸喪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

狼と絶望の黒龍

### 【Nコード】

N2281V

### 【作者名】

黒馬狸喪

### 【あらすじ】

帝の嫡子なのに絶望を振りまく災厄の黒龍と呼ばれその存在を疎まれ日陰者の生活を送る青年、一族を滅ぼしたと蔑まれ忌み嫌われる少女。その二人が出会った時、歴史の歯車が動き出す。この二匹が出会い次第に惹かれあう・・・数多の思惑を巻き込みながら

## 暗殺者（前書き）

みなさんこんにちは

この物語はとある国の首都から始まる。

黒龍と狼この二匹が出会ったとき物語は動き出す

## 暗殺者

静かすぎる街のある路地で仕事を終えた俺は転がっていた木箱に座りながら空を見ていた。

「相変わらず、やって意味有るのかって仕事だよなこれ」

そんな事を呟き相変わらずぼろっと空を見る。

その時、表通りにいた兵士がやってきた。

「敵国家の首都も制圧完了。王族も捕まえたしこの戦俺達の勝利だな悪友。<sup>きょうだい</sup>」

「俺達じゃなくてお前だろ、大將軍」

悪友の言ったことに訂正をしそいつに目をやる。

「なんだ？レックス」

「ナンダだナンダ・M・レックスだファミリーネームで呼ぶな。後、紛らわしい言い方をするな。」

紛らわしい名前のほうが悪いんじゃないかとおもいなが、自分の名前も考えてみる。

フォールテイトウッド・D・レックス、ナンダとは腹違いの 幼なじみだ。

「フォール仕事は…終わったみたいだな」

「お前みたいに軍を指揮する訳じゃないからな。」

そう俺の仕事は美術品やその国の文化財・内政の記録などを盗む仕事だ。

要は国が戦争で忙しい時に色々盗ってくるのが仕事。

「ま、世間様に顔向け出来ない仕事だけだな。」

「お前の方が軍に関することがうまいのにな。」

そう言いながらナンダは俺の足下に置いてあった麻袋を肩に担いで持って行った。

「後で中央広場まで来いよ。」

去り際にそんな事を言いながら、

「自分の要件だけ言いやがって、軍の士気を上げるのはお前の専売特許だろうが、」

もう居なくなった人に言っても仕方がないが、

ナンダが去って行った表通りとは反対の方に目をやると誰かが歩いてきた

「暗殺者が、なんで俺が城に居た時に狙わ無かったんだらうな。」

路地の奥から歩いてくる人影にそう問うてみたが返事は無し。今、この都市を堂々と歩けるのは兵士か俺みたいなスパイぐらいだ。この国の民は戦争に負けて自分たちが支配下に置かれたことを理解しているだらうし、ナンダが監禁は無くとも、それに近い命令をだしていたはずだ。それ以外の可能性は他の国のスパイか暗殺者ぐらい

だ。

路地を歩いてきた暗殺者は少し離れた位置で止まった。腰を上げ暗殺者と対峙する。静寂が場を支配し空気が張り詰めていく。

緊張の糸が切れた瞬間、刹那、二つの影がすれ違う

倒れた影が一つ

「速さはあつたけど技術はまだまだかな？」

「……」

「返事が返ってこないのに疑問形はだめか、」

気絶させた暗殺者に近づく、最期の反撃は無いみたいだな。暗殺者の外套のフードを脱がすと露わになる漆黒の髪だった。

「顔つきを見る限り女かな？」

取り敢えず身に着けていた物はずし相手の懐を探る。

女を全裸にしてきていた衣服を調べつくしてわかったことは、握っていた剣以外に懐から小刀が三本出てきたくらいだ。その内一本は懐から、後二本は小刀と言うよりナイフで両足のブーツの表面にそれぞれ一本ずつ隠してあった。背中全部を使った刺青があったこと、髪が先のほうだけ白銀で綺麗な事くらいか……

気になったのは右の目元に小さな白い星型の模様があることか

とりあえず、下着から全て脱がしてしまったので服を着せていく、

「それにしても、背中にある刺青、月に吼える狼かな？」

暗殺者だから武器と言うか暗器を大量に懐に入れてるのかと思っ  
て脱がしてみたが

そんなに暗器を隠してはいなかったな。

動けないように後ろ手に腕と足を縛りフードを頭に被せて肩に担  
いで広場まで歩き出す。

-

は場面が変わ

る記号として使ってます

暗殺者<sup>かのしよ</sup>を肩に担ぎながらナンダがいるこの都市の中央広場に行っ  
てみると。

ナンダが帰国の準備をさせていた。この国の民は一度俺達の国、帝  
国の首都に連れて行かれるだろう。

負けた国の運命は奴隷として生き残るしかない・・・そして、大半  
の者達が奴隷として祖国の土を踏む事になるだろうけど。

「フォール肩の荷物は何だ？」

「襲いかかって来たから拾った。」

「あっそ」

奴隷は本来国のものになるから兵士が勝手に手を出していいもの  
ではない

略奪も勝手気ままにやれば軍規違反で裁かれる。まあ、そういう略  
奪を国から依頼されてる俺は例外なんだろうが

自分の馬に暗殺者かのしよを馬の鞍に乗せようとしたが、足を縛った所為で鞍に乗せられなくなってしまった。  
仕方ないから落ちないように鞍の上に縛り付けてその後ろに乗る。

馬に乗り自分の前に乗せた彼女の背中に落ちないように手を置きながら出発の合図を待つ。

別に軍に所属しているわけではないから隊列とは少し離れた所で様子を見ていると、

「ん、うあゝ……う」

彼女が声をあげた。起きたのかと思ったがどうやら違うようだ。隊列の最後尾ナンダがいる場所に馬を進める。

丁度、隊列も準備が整ったのか捕虜を連れて行軍を開始した。

「いい加減その子について教えてもらおうか、鉄火面」

「鉄火面ってなんだよ、後こいつは俺を暗殺しようとしたから気絶さした。」

言い寄ってくる女に一々笑顔を向けてるヤツに言われたくはないと思いつつも

とりあえずことの経緯を説明する。

「お前はどんな女にも見向きもしなかった朴念仁の鉄火面だろ、それにしてもお前が暗殺か俺じゃないのか？」

俺みたいな大將軍が狙われるならよく分かるがフォールみたいになく表に出ない人間を狙うなんてよほど優れた情報網をもっている

のか、たまたま狙われたかのどちらかだろうな。

「いや、それはないと思う。」

「何でだ？」

「俺もお前も王位継承権を放棄しているが曲がりなりにも王族だ。狙う価値は十分にある。」

「それは俺もお前も同じそれじゃお前だけが狙われる理由にならない」

「王位継承権を放棄する前の俺は継承の序列は第一位だ。」

俺もお前も皇帝の子だそれだけで利用するのも狙われるのも理由はあり過ぎる。

「……あのババアの刺客か」

「さあな、どちらにしろコイツが起きれば分かる。」

「その子、口を割るのか？」

「こいつはいつ切られてもいい下っ端だろうけどな。」

「……おいおい」

その後も雑談をしながら馬を進めていたが特に変わったことは無く順調に進んでいった。

変わった事と言えば彼女の背中を撫でてるとたまに声をあげるく

らいか

「で、お前はその子どつするんの？」

「んぐ、とりあえずお持ち帰り？」

「………なんで疑問形なんだよ。」

目を開けたとき最初に見えたのは揺れている砂利道だった。

そして、自分が馬に縛れ運ばれている事に気づき身体が強張りそうになるのを全力で抑える

馬を操っている者と話している者との会話を聞いているうちに自分を運んでいるのが自分が暗殺しようとしていた奴ともう一人はこの国の軍の大將軍だと気付いた。

二人の会話を聞いていて判った事は、この軍が帰還途中と言う事ともうすぐ野営の準備をするために行進をとめる事ぐらいしか聞けなかった。

軍の野営地から少し離れた林で馬が止まり乗っていた奴が降りた。

「寝たふりしてるのもいいけど逃げるなよ。」

「！！！」

気絶したふりはばれていたらしい特に隠れていたわけではないがこちらに意識を向けていたのか馬から降ろされ木に繋ぎ止められた。

「逃げ出すなよ、セブルス見張つとけ。」

馬に見張りをやらせて自分は軍の野営地に向かつていった。その間に縄抜けをしようとしているとふと前方が唐突に暗くなったので顔を上げると

漆黒の馬のケツがあつた………

突風が耳元をかすめると同時に黒くて細長いものが顔の横を通り過ぎた

あの馬が後ろ足で蹴つたのだ。そして、後ろ足で蹴られた木を見ると

「蹄の後がしっかりついてる……何もするなつてことか」

縄をはずす為命をかける気にはなれないのでおとなしく待つてみる

アイツは二人分の飯を持って帰ってきた。そして背後の木の傷を見て、

「逃げようとしたのか、セブルスちゃんと役目を果たしたんだな偉いぞ。」

漆黒の馬を撫でた後こちらに歩いてきて私と視線を合わせるようにしゃがみこんだ。

「・・・何か用か？」

目の前の青年を挑発させるような言葉を吐いてみた

「俺を見定めているのか・・・そんなことより自己紹介と聞かないか？」

「・・・」

私は無視を決め込む事にした、暗殺なんていう裏の仕事をしているなら下手に情報をもらさないのだから得策だ。それを分かかって聞いて来るんだから、

「・・・ドSか？」

「お望みならその言葉道理にマドモアゼル、」

「選択肢が有るなら全力で回避の方向で、」

暗殺者の口は相当堅いらしい、多分食べ物を餌にしても釣れないだろう

嫌、諦めなければ暗殺者のデレの部分顔を出す。今はツンの状態なだけだ

頭の中の変な声は無視する。友を見捨てるのかと叫んでいるが・・・

「俺の名はフォールティトワード、長いからフォールって呼んでくれ。」

「・・・知ってる」

「はっ！！まさかストーカー！？」

暗殺者かしのに半眼で睨にらんできた。さすがにふざけすぎたらしい、

「いい加減名前を教えてくださいると嬉しいんだけど、」

「・・・お前の凄さが実際に向き合わなければ分からないか、」

「俺の事を資料か何かでみたのか、」

黙って頷いたところを見ると正解らしい

(・・・と、いつか何で俺の事ガン見してんの？

こっちが目を合わせようとすると微妙にずらしてくるし、何を試している?)

「・・・・・・ブランク」

?、疑問符を浮かべながら彼女を見てみると今度は目を合わせてくれた。

多分さっきの呟きは自分の名前を言ったのだろう。何で名前を教えてくださいか分からない

でも、教えてくれたならこちらに心を向けたと言う事が

「さて、お前を生かした理由だが、」

ゴクッ

彼女が緊張のあまりノドを鳴らした音だろう

「俺に仕える」

「!？」

## 暗殺者（後書き）

### 登場人物

フォールテイトウッド・D・レックス

年齢19 身長176cm 一人称は俺

容姿 黒髪黒目 髪は背中のみまで無造作に伸ばしている

### 備考

帝位継承権元第一位、今は権利を放棄している

貴族たちからは絶望を振りまく存在として忌み嫌われているその所為か命を狙われることもしばしばある

ナンダ・M・レックス

年齢19 身長187cm 一人称は俺

容姿 金色の目を持ち焰髪を短く纏めている

### 備考

軍の総大将で軍に関しては全権を握っている。天辺まで実力で上り詰め た猛者で けっして脳筋などではなく頭もそれなりにある

フォール同様帝位継承権を放棄している（放棄する前は第二位の位）

また、フォールより後に産まれたが腹違いの兄弟

ブランカ

年齢18 身長167cm 一人称 不明

容姿 髪の色が漆黒と毛先が白銀の変わった色をしている。目は茶色で髪の長さは腹位までの長さ

### 備考

フォールを暗殺しようとしたがあえなく失敗する。裏側の人間達には黒狼という名で呼ばれていた。腕は立つ方だが今はフォールの侍従として暮らしている。フォールが仕事柄上略奪行為がある程

度認められているので依頼された略奪品の一つということであつさり関所を通過し入国をする

#### 世界観

フォール達が暮らすドラグニア帝国は龍と人の子によって起こされた国

国民は尊敬の念を籠めて帝の事を龍神と呼んでいる。

国民の六割は竜人で残りは移民など外から来た人達

また、王族など龍の血が濃い者達は龍化（ドラゴンの姿になる）する事ができる。

直系の者はそれぞれ特異の力を持つ

大陸は群雄割拠の時代で激しく乱れている

軍隊の種類は陸軍と海軍が存在し空軍は国によって有ったり無かったりする

続きは次

回到

獸耳の侍従（前書き）

前話から三年の時がたっています

## 獸耳の侍従

「俺に仕える」

自分が殺そうとした相手から放たれた言葉は余りにも衝撃的での時はすぐに返事を返せなくて焦った。嫌、返事が返せない事ではなく標的に仕えさせられたら何をさせられるかと言うか何をされるかわからないその事が不安で焦ったんだろ。

そしてまたこの光景が過去の事でありまた夢だという事も理解した標的が私を下女にした時つまりこれは三年前のあの光景だとゆうことか……

(……夢、早く覚めないかな)

僅かな期待を込めた思いも夢は無視し最後まで見せる。

私が覚悟を決め彼に自分の答えを言う時、今なお私はどうして彼の言葉に頷いたのかこの夢を見させられる度に考える。

一時の気の迷いなのか、生に縋り着きたかったのか私にも分からなかった。ただその時の私が酷く混乱していたような気がしないでもない。どっちにしろ私は彼の提案を呑んだそれだけだ……

段々と意識が夢から離れていく

目を開けるといつも通りの夜明け前の空、夜着からいつものように仕事服に着替える。

彼に仕えた時に一番最初に渡された物だ、最初のころはメイド服を着るのは相当抵抗があったまさに冥土服だった

白と黒を基調とした半袖、丈の短いミニスカ、白いニーソにエプロンという仕立てた人の趣味が多分に入った服だった、しかもサイ

ズが不思議なくらいぴつたりだった・・・いつ調べたんだろ？

最後に黒龍の鱗をなめした膝丈まである確りした造りのヒールの高いブーツを履いて部屋を出るために扉を開ける。

二階にある寝室から一階の居間に行ってみるが暗闇に包まれた居間にこの家の主人がいるわけがなく雨戸を開けキッチンに向かう  
キッチンで朝の買出しに向かう為の物を持って裏口から屋敷を出る、鍵を閉め林を抜け城の表門に向かう

城の表門から大通りに出て商店街に向かう途中中前の方からだらし  
ない格好の女騎士が歩いてきた

脛まであるサンダルブーツを履いて腿の中ほどまでしかないポロポロのジーパンとヨレヨレのTシャツを着て寝ぐせなのかアホ毛なのか分からないけど二、三本跳ねた髪  
そんな格好に似合わない腰のベルトに黒い装飾過多な剣（けん）を携えて欠伸をしているスレンダーな美女

「だらしないよ、ミカ」

「メイド服着ていわれてもね〜」

グサツ！！

スレンダーなだらしない金髪碧眼美女のミカに言われると余計に胸に刺さる

「い、意外と気にしてたのね」

「恍惚とした表情で言われても・・・」

「フフフ」

ミカはフォールに仕えてるただ一人の近衛騎士だ。他の人はフォールの特異の力の所為で誰もやりたがらない。勤務中は人が変わったみたいに真面目になる。ピシツと近衛騎士の鎧を着こなす姿は凛々しいらしい・・・興味無いけど、ついでに騎士団の中ではダントツで彼女にしたい人no.1  
そんな事より買い物に行かなくちゃ、

ミカエラこと私ミカは三年前に仕え始めた一人の人狼の少女の護衛も任されている。

女性に興味を示さなかったフォールが唯一興味を示したのがブランカだった。最初は暗殺者と聞いて驚いたがメイド服を着させられた本人が俯いて顔を真赤にして狼耳をへニヤンと垂れさせてぶるぶる震えていて殺人的な可愛さだった、しかも服に関して何か言われるたびに耳がびくびく反応する・・・

フォールが落とされたのも頷ける、しかも私はフォールに仕えて12年だがブランカが来てからの三年とそれまでではフォールの対応が変化してる。

例えば、フォールは滅多に人と同じベットに寝ないはずなのに（私だってブランカが来る前は9年で二、三回くらいだったのに）ブランカとは既にご主人様の命令と言う事で添い寝回数<sup>へたれ</sup>は三桁にたっている・・・その間に何も無いのはフォールが奥手<sup>へたれ</sup>になっているからなんだろうけど・・・

「ミカ、置いてきますよ」

「ひどーい、ブランカのイジワル、耳をもふもふしちゃっわよ」

「………やったら斬ります」

「ぶー、フォールにさわらしてんに」

「／／／なっあつ、あれは命令で、その、あの／／／」

うん、真赤になって可愛い眼福眼福、嫁に欲しいな

何だかんだで裏の世界からこっちに引つ張り出してもらったことは  
ブランカ自身も感謝してんるんでしょね、それにしても最初にフ  
ォールが侍従にしたせいかブランカもハッキリ気持ちを表せないで  
いるし

横で見ているとじれったいのよ、ただ肝心のブランカが自分の気持ち  
が異性に対するものなのか理解知れないのよね、よしっここは一  
肌脱いでやるか!!

考え事が一段落しふと回りを見回すとブランカが居ないどうやら  
置いていかれたらしい

溜息を一つし商店街に向かう

## 獸耳の侍従（後書き）

引き続き世界観・・・特異の力について

王族など龍族の血が特に濃いものが持っている特異の力は様々なものがあり、自然災害なみの能力が大半・・・所謂奥義いわゆるです。

能力にも種類があり、例えば・・・

リンフォースメント

：自己強化・・・字の如く自分の肉体などを強化する単純な能力だが、単純ゆえに能力が覚醒したてでもすぐ戦える・・・オーソドックスなタイプ

：フィンミナ・・・炎や氷、雷などを司る能力で、制御が大変難しい、また使い方次第では、一人で何万人分もの戦力になる

ジェノサイド

：大量虐殺・・・本人の意思に関係なく撒き散らされる。よってこの種類の能力者は歴史上ほとんどが迫害されてきた

ミカエラ・フェリックス

年齢23 身長173cm 種族 竜人 一人称はアタシ

容姿 出るところが出ていて締まるところが締まっている金髪

碧眼の美 女、若干レズだが面倒見のいいブランカのお姉さんの立場

備考 宿泊街にある宿、捨て猫の宿【スロウアウェイキャッツ】に住んでいる元ストリートチルドレン。誰もやりたがらないフォールの近衛をしている、本来軍では一軍の大將をやれるほどの器だが王妃達に疎まれていてフォールの近衛をしている所為で出世の芽は潰えていてフォールはその事に負目を感じている。叶わないと知ってはいるがフォールと恋仲になりたいと思っている

ブランカ・W・ロボ

年齢21 身長170cm 種族 獣人 一人称は私

容姿 頭と尻に漆黒に先端が白銀の毛並みの狼の耳と尻尾を持つ人狼で月狼と呼ばれる一族の生き残り、この一族は彼女の所為で滅亡したとして他の生き残りに命を狙われている。フォールによつ

て今まで着ていた服の代わりにメイド服を着させられている。ただし、龍鱗のブーツと脇差は取り上げられていない為いつでも戦える

備考 普段はフォールの住んでいる物置小屋という名のポロイ離宮に住んでいる（フォールとは別に自分の部屋が有りそこで寝泊りしている）普段の仕事は飯の買出しと屋敷の掃除、後フォールが飯を作る時の手伝いをしている。三年間フォールたちと共に過ごしたお陰で子供の頃のように明るい性格になり、そのことや裏社会から引つ張り出して表で生活できるようにしてもらった事にも感謝している。しかし、裏社会の者達から狙われることになりみんなに迷惑をかけている事が心に引つ掛かっている。今は本人もフォールに惹かれていることに気づいていない恋とも呼べない恋をし始めている

やっとブランカのこと詳しく紹介できました。前話ではおざなり程度にしか出来ませんでしたから嬉しいです感想・レビュー等誰でも受けられるようにしたので宜しくお願いします。では、続きは次回に

黒の絶龍（前書き）

主人公登場！！

楽しんでいってください

## 黒の絶龍

ブランカがミカと一緒に商店街に向かっている頃そのご主人様はと言つと・・・

城の離宮つまり自分の家にいてやって来た客を無視して料理を作っていた

「フオールいい加減にしないとその料理を食べなくしてやるぞ」

「それはないだろ、ゲペル・P・レックス殿」

「敬語は止めるお前の方が半年先輩なんだから」

「……………へいへい」

こいつ、ゲペル・P・レックス俺と異母兄弟にして帝位継承権第三位の男そしてこの国の宰相  
内政に関しては右に出る者はいない頭でっかちにして俺達三兄弟の中で継承権を放棄していない存在

「何か、くだらない事を考えていませんかフオール？」

「考えていたとしてもお前には関係ないだろ。」

「貴方はどんなに軽い罪を犯したとしても良くて極刑・・・でなければ死罪の身なのですよ。」

今更言われるまでもない、そんな事とうの昔に気づいていた。だ

からこんな城壁の中にはありながら誰もよりつかない離宮に住んでいるのではないか

メガネは何が言いたいんだかまさかこんな事を言う為に来たんだたら叩き出してやるうかと内心考えつつ腹の探り合いを続けるはずが、

「ゲペスそろそろ時間だよ」

扉を開けて入ってきた黄白色の髪に暗褐色の肌の女性によって中断されてしまった。

肉付きのいい手足の長い彼女は大陸の南西の猿人の国のお姫さんでうちと同盟を結んだ時

政略結婚という名の人質として5年前にやってきてゲペスに嫁いだ人で今は軍の中将をしている彼女

キン・A・シコウ

「もうそんな時間か、会議なんかほっといて俺の部屋に行かないか？」

「~~~~~ッ！ そんなダルそうな顔しないで」

「そういう事は顔を赤らめながら言うものじゃないよキン」

「.....はい」

目の前で龍と猿の惚気た会話を見させられているこっちの身にもなっただけの後、何しに来たんだお二人さん。それに、人の話を聞けキスが「あつ、んっ！」てここはラブホでも娼館でもないぞ.....

「はあ~~~~、二階の客間にベットがある、ご自由に」

「おや？ 我々は何も言ってますが。まあ、相手の行為には甘えておかないと無礼ですからね」

してやったりって顔で何言ってるんだよこの似非紳士、いやドS紳士か彼女限定の・・・

「ため息は幸せが逃げますよ大泥棒さん」

「そんな迷信信じるかよ頭でつかち・・・後、キンがもう行きそうな顔してるからとつと二階で決めてこいよ」

「あなたは何も判っていない、いきそうでないようにしてあげる時にお願ひしてくる時が一番可愛いんじゃないですか」

ため息をついてそんなことを力説されてもこちらとしてはドン引きするしかないんですか・・・

ホントあんたら何しに来たの？ マジでやりに来たって言ったら二度と勃たなくしてやる

まあ、何しに来たかは察しが着いていない訳ではないが

— —

「よかったの？ フォールにあの事伝えなくて」

「おや、私との秘め事より他の男が気になりますか？」

「そんなわけ無いだろ、ゲペスとは・・・」

「・・・とののは？」

「~~~~つ、言えるわけ無いだろバカ!!」

「ですが、言ってもらわなければ伝わりませんよ」

頭から煙を出し顔を真っ赤にした彼女が起こした行動は単純にして明快

それは…………目の前に居る存在を殴る事だった。

「全く、いくら恥ずかしいからと言って手を出す事は無いでしょう」

「~~~~だって…………」

「だってもへちまありません。だからあなたは脳筋と言われてしまふんですよ。」

それにフォールもバカではありません私が態々（わざわざ）やってきた理由も察しはついているでしょうし

-  
-

先に行ってしまったブランカに追いつけたのは商店街に入っただけだった。

流石にからかい過ぎただろうか？まあ、気にせず護衛という名の荷物持ちを続けよう

それにしてもこの商店街の活気はスゴイ、始めてきた人何かは祭りと勘違いするほどに…………

「これも、皇帝のおかげなんだろうね」

「・・・・・・・・・・」

あたしの独り言もまわりの喧騒もブランカにとっては無い物と同じ、己の五感をフルに使い

この食品の張りは、汁は出ていないか、目は白くないか、変な臭いはしないか、今日一番の品を選んでいく。本来、商人にとって売り物を出したり、いじったのに買わなかったりするお客は嬉しくない存在のはずが逆にここではブランカに買ってもらうために目玉商品を残して買ってもらおうとするほどの人気だったりする。何でも彼女にその日商品を買われる事は商店街で自慢できるらしい

「　　？　　」

「・・・・・・・・・・」

よほどいい買い物が出来たのか上機嫌なのはいいが、商店街のおじさん、おばさん達のお裾分けの所為で前が見えないんですがブランカさん・・・買い物以外も持って

日頃の鍛錬の賜物かふらつく事無く城門まで辿り着いた時、視界があけた何事かとおもつと

いつの間にかフォールが来てお裾分けを持ってくれたらしい（そうやって優しくすると惚れるだるバカ）

ミカエラが悪態を着いているときフォールはブランカに向き直り

後で話がある

ただそれだけ、それだけの言葉はずが運命の歯車が動く引き金となる

## 黒の絶龍（後書き）

### 登場人物

ゲペル・P・レックス

年齢19 身長169cm 一人称 私

容姿 紫髪紫眼の持ち主

### 備考

国の宰相で内政に関しては皇帝を越えるといわれるほどの秀才  
フォールやナンダと比べて武に関しては苦手なためコンプレク  
スになっている

昼は働き夜は彼女とSMプレイに励む熱々？で国一番の鴛鴦夫  
婦と いわれている。フォールから半年遅れて産まれた

キン・A・シコウ

年齢16 身長156cm 種族 猿人 一人称 キン

容姿 黄白色の髪に暗褐色の肌を持つ猿国の姫

備考 猿の国の娘で同盟を結ぶ時に厄介払いされた。その所為で  
国に来た頃は誰 も信じず、刺々しい雰囲気纏っていた。

ゲペスのちよつと過激なアタックで心を開いていった。ち  
よつと脳筋ぎみ

### 世界観

ドラグニア帝国の帝都について・・・

山を丸々使った城の麓に同心円状に城下町が広がっている、八つ  
の門から城に向かって八本の大通りがある。門は八方位に合わせて  
立っている門から一直線に城まで大通りが伸びている。それぞれの  
大通りで売っているものや建物が違っている。  
通り一つ一つに街の名前がついている。

例えば・・・商店街、宿泊街、宝石街、裏街などの名前がついてい

る。

また、城下町が発展していった順に旧市街、中市街、新市街に区分できる。

続きは次回

に・・・

書いていて知識不足が目立ったので知識を集めたりするために連載を休みたいと思います。すいません では、また会いましょう

## 龍の悩み

「ご主人様、何のご用でしょうか？」

「.....」

無言、彼は何か思い悩んでいるようで眉間に皺が寄っていた。あれでよく木にぶつからず歩けるものだ

「フォール、何を思い悩んでいるんだと思う？」

「わかんないよ、ミカエラ」

二人して首を捻りながらフォールが何を悩んでいるのか考える...  
けれど、やっぱりわからない。

わからないけれど普段飄々としたフォールが思い悩む程のことなるだろう離宮わかやについても口を閉ざしたままキッチンに入り深鍋をだしその中に黙々と買ってきた食材をドボドボ鍋に入れて煮込んでいく。紫の煙が上がり鍋の中身が妖しく光りだしたら次に塩、胡椒お入れ。てさらに煮込む。煮込んでいる時も心ここに在らずという風にして  
いるそして煮込み終わったのか蓋を開け皿によそっていく。どんな  
錬金術を使ったのかわからないが、美味しそうなシチューが出来て  
いた。スプーンをよういして三人で神に感謝して食べた始める。

あんな作り方なのに出来たシチューはとてもおいしかった。

昼食の後片付けも終わり沈黙が場を支配する。

「ブランカ少しいいか」

うむを言わさぬ語調でフォールがとうてきた。私はただ“ハイ”と喋って対面に座った。

ミカエラは空気を読んでどこかに行ってしまった

「お前にこれをやる」

唐突にフォールが喋ったものだから飛び上がってしまった。そしてフォールが突き出した腕に握っている物を見てまた飛び上がったまいった

「……これは、もしや」

「そう、母さんの形見だ」

フォールが突き出してたものそれはフォールが肌身離さず持っていた、玉を抱いた龍がついたペンダントだった。

「でも…それは、それは」

そんなに大切なもの受け取れるはずが無い、それをどれほどフォールが大切にしているかなんて赤ん坊でもわかる。そう言って断ろうとしてもフォールの真剣な眼差しにあって喉まででかかった言葉が消えていしまう。

覚悟を決めて手を伸ばすが、伸ばしきれず宙を彷徨ってしまう。手を出したり、引込めたりしている内に痺れを切らしたフォールがブランカの手を両手で包み込むようにしてペンダントを握らせた。

そして・・・かけてみてくれないか？そう言った

「・・・・・・・・えっ？ あっ！ハイ」

その言葉を残して彼女は自室に消えた。

フォールからもらったペンダントまるで母親のように龍が玉を抱き護っている。

ペンダントの留め金を外し首にかけ姿見の前に立ってみる。その瞬間、玉が突如光だし語りかけてきた。

あやつの相手は貴様か・・・

・・・・・・・・と語りかけてきた。

呼ばれてないけどジャジャジャジャーン(前書き)

ハク ヨン大魔王は出てきませんあしからず

呼ばれてないけどジャジャジャジャーン

光りだしたペンダントから南国の踊り子風の女性が出てきた

「ふんふんふん、こゝなるのね〜」

「……!?!?」

ペンダントから出てきた少し透けている女性は自分の皮膚を引っ張ったり裾をめくって中に手を入れたり……!?!?!

ブランカが口をポカンとあけている間にペンダントから出てきた女性は衣装箆笥おもむきに近づくと徐に衣装箆笥の壁を叩き始めた。

「あつ!!! そこは……」

「ふ〜ん……ここなんだ」

女性はニヤリと笑うと衣装箆笥の壁を押しした。隠れていた棚が口を開く、女性は開いた棚に手を突っ込み奥からお菓子を取りだした。

「二十年ぐらい経っているけど、お菓子の隠し場所は変わらないのね」

「ああ〜私のお気に入りのおモンブランが………どうしてその場所を知っているんですか?」

「……」

「……」

「あなたは誰ですか？と、言うか何ですか？足があるのに若干浮いてたり、滑って移動したりお化けですか？」

「うーん、当たりでありハズレかな。まあアナタに取り憑いたりこの部屋にいるからって祟ったり呪ったりはしないから、そんな野生動物みたいに毛を逆立てて警戒しなくていいからね！」

人差し指をピツと立てている三十路の女性を見ていると警戒しているのがバカらしくなってきた。

「貴女は誰ですか？」

「やーととその質問をしてくれたわね、人のこと三十代のババアって余計な事考えているのに」

「！-！」

「ふふ、その驚いた顔が素の顔なのね・・・カワイイ食べちゃいたい。」

「食べる食べないはどうでもいいとして名前おしえてください。」

「ん、そうね私の名前はミスラよ・・・それにしても食べてもいいのね」

最後の方は小声で聞こえなかったがミスラというらしい・・・結局何なんだろ？

「こづみえて生きている時は一児の母だったのよ-！」

胸を張って堂々と答える彼女……このボロ小屋しげむらにいて一児の母  
ってことは

「そう、あなたの考えている通りフォールティトワード・D・レッ  
クスの母、ミスラ・ストリップ

ファタルと出会う前は世界をまたにかけのダンサーだったのよ」

「……帝王を呼び捨てに」

「あたりまえじゃない自分の旦那を帝王様なんて呼んでられます  
かってね。

公的な場ならともかく私的な場で敬称やら官位やらで呼んでた  
らホントにやってられないわよ」

確かにこの国で自分がゴテゴテの華美な服を着て無駄に偉そうに  
しているなんて今の妃ぐらいだ  
かえって小物に見えるのは見ないふりだが……そんなことより何  
で化けて出てきたのだろう？

「そんなの決まっているじゃない、アナタがフォールに選ばれたか  
らよ」

呼ばれてないけどジャジャジャジャーン（後書き）

フオールのお母さん自由気儘にブランカのおやつをあさります。  
幽霊で実態が無いのにようできますね。 母は強し！！

お化けなんか・・・

私がフォールに選ばれた？それはどんな意味でなのだろうか、フォールという強大な力を抑える生贄としてだろうか？

「面白いほど事情がわからないって顔してるわね・・・まっへたれなああの人の血が流れているから仕方ないか」

ミスラが何かブツブツ言っていたがやはりさっきの選ばれたという事が気になる。

「選ばれたってどういう事ですか？」

「どうもどうも文字通りよ」

「・・・？」

「むかし、むかしあるところに一匹の龍がいました・・・

「えっ！！いきなりナニ？」

「いいから黙って聞くー！」

「ひゃっちやいー！！」

「よろしい」

唐突に語り始めたと思ったなら怒られた・・・理不尽だ。

「その龍は人々から恐れられていました。人々はある日、国で一番の女性を人身御供いけにえとして奉げました。しかし龍人に喰う趣味はなかった。龍はある日突然、巢にやって来た女性に対しどうしたのか聞きましたが、女性は龍を見て恐ろしさのあまり気絶してしまいました。困ってしまった龍は女性を巢の奥の柔らかい寝床に寝かせ狩りにいききました。

狩りから帰ってきてみると女性は巢の奥で泣いていました。

「どうして泣く人間よ？」

女性は龍が話しかけてきて驚きましてが質問に答えました

「私は貴方の貢物としてここに来ました。」

人からの貢物ときいて驚きました。なぜなら彼が知る限り彼の一族が貢物を頼んだ覚えは無いのです。

「我が一族は人は食わん。それに生贄を頼んだ覚えも無い帰れ」

人を食わないと聞いて安心しましたが帰れと言われても帰れません。

彼女の家は貴族といっても下級貴族で権力もなくこれで帰ったら家が潰されてしまいます。

「私はわけあって帰れません。厚かましいお願いではありませんがどうかここに留めてください」

「泊める事は容易だ。しかし、貴様はこの厳しい環境で生きられるのか？」

「……それでも生きてみせます」

そういった彼女の瞳はどこまでもすんでいた。

「……」

「……」

「えっ！！終わり！」

「もちろん」

「結末は？」

「続きは王立図書館で」

「勝手にしゃべって、勝手に終わった。マイペース過ぎて着いていけない……」

「まあ、後の話は省くとして」

「アナタがフォールがくれたそのネックレスはこの国に伝わる三種の神器の一つなの」

「はい？」

「正式名称は龍守の首飾りといって残り二つのピアスとリングと並

んでこの国の三大国宝よ」

「そんなの王子とはいえよくフオールが持っていていられたね」

「たとえば、あの子がどれほど嫌われていようと神器の所持権は決まっている。」

「なぜですか？」

「それは、この神器が出来た神話に由来するの・・・」

それは、はるか昔ある一匹の龍が一人の女性に恋をした。

しかし、女性は人族ゆえとても弱かった。だから龍は己の魂ともいえる龍玉を三つに割り

それと己の体の一部を混ぜて三つの装飾品を造った。

一つ、彼女がどこに居てもわかるように己の目と玉を混ぜ合わせ  
て首飾りを造った

一つ、彼女が苛酷な環境や化け物に襲われても大丈夫なように己  
の鱗と玉を混ぜ合わせ耳飾りを造った

一つ、彼女が邪を打ち払えるように己の牙と爪と玉を混ぜ合わせ  
指飾りを造った

彼女はそれを受け取り彼と永遠の愛を誓い合った

やがて、夫婦になった二人の間に男の子が出来た。男の子は成長  
し青年となった時、彼女はいった

「この三つのたからものは彼が私にくれたもの。それをアナタに  
渡すわね」

けれど、青年はもらえないと言った。母がその三つのたからものをどれほど大切にしていたか一番近く

で見えていたからだ。けれど、彼女は言う

「アナタにもいずれば大切な人ができる。そのときにこの三つのためからもので守ってあげて。私がして

あげられる最後のおせつかいだから」

それをきいた青年は何も言わずしかし、大粒の涙をぼろぼろとこぼしながら彼女の手から三つのたから

ものを受け取った。そして彼女の灯は消えた

やがて、青年に大切な人ができたとき青年は思いを告げ三つのたからものをおくつりたからものは彼女を守った。

母から子へ、子から孫へと受け継がれる中で三つのたからものを悪用しようとした者達がいたしか

し彼等はたからものに近づくことすらできなかった。

それは受け継がれるという連鎖の中でやがて三つのたからものは受け継ぐ者受け継がせる者達の想いを

少しずつ貯めていきやがて、意思をもつようになった。

そうやって意思をもつようになった三つのたからものが自らを悪用しようとしたものたちをとうざけて

いたのである。やがて、三つのたからものは継承者以外は自らに触れられないようにしていった。

………つてのが神話の内容で今もそれは変わらないのよ

「つまり、この首飾りはとってもすごいもので今はアナタとフォー  
ルしか触れないってこと」

「でも、ミスラさんこの中から出てきましたよね？」

「だって私実態ないし、いったでしよたからものは意思をもつ。

そして、たからものが顕現する時は先代の継承者の形をとることが多い」

「じゃあ、その姿をしていても本物のミスラさんではないってことですか？」

「そう言うわけでもないんだよ。

死んだ時に意識が亡くなって目覚めたらこの部屋だったの、で頭の中には知らなかった知識が入ってたりして自分の中に知らない他人が住んでる感じ？」

いや、首を傾げられても私は体験してないので私にはわかりません。

そんなことよりさつきいていた、このたからものをフォールから渡された意味っていうのを教えて下さい。「意味はカンタンよある契りを結ぶため、そしてアナタを守るため」

「……………私を、守る、ため？」

「そう、アナタを守るため、あとはいわなくてもわかるはね」

「……………は……………い」

「よろしい、ならば誓いの言葉はフォールに言わせるのよ曖昧なものや空気を読んで先に返事をするとかはなしよ」

話をきいて呆然とし、消え入りそうな返事をした彼女にミスラがおくったのは激励の言葉ではなく有無を言わさぬ語気で誓いをするにあたっての注意すべき点を教えただけだった。

「……返事はっ!!」

「ハイッ!!」

しかし彼女にはそれで十分だった話をきいて呆然消え入りそうな彼女にミスラは激励の言葉ではなくその絶対強者の命令のほうに心強かった。そして彼女は扉へと歩き出していった

「じゃあ、……行ってきます」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2281v/>

---

狼と絶望の黒龍

2011年11月29日19時45分発行